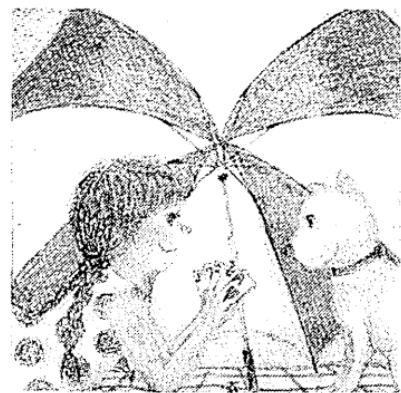


読者の欄

恋



向日市・西岡 真子
(主婦・47)

川
曜日

層間の気温がどんどん上がつても、夕方はぐつと涼しくなるこの時季、

川辺はなんともいえない風が吹く。日が落ちて暗闇に包まれだすと、どこ

となく心を和ませる小さな「明かり」がぽつりぽつりととどりだす。

子供のころは「ほう、ほう、ほたるこい」と歌いながら川に入つて、蛇穴が光ると間違わないようにとびくびくしながら、点滅する「明かり」が人の衣服にとまつた

年に入つていよいよ梅雨の季節。もちろん田畠にとつては大切な雨ではあるけれど、蒸し暑くてうつとうしい。そんな中、この時季しか見られないすきな光景がある。それは、「ホタルの明かり」。

大人になつてからは毎年「明かり」を求めて川辺にたたずんでいる。忙しく働く現実の世界から離れて、

でもいろんな方の努力もあって、今でもあちこちでホタルを楽しむことができる。水辺においては、ホタルを楽しむことが

う姿、迷つた「明かり」

は、幻想の世界へと誘つてくれる気がする。

こんな都会の京都市内でもいろんな方の努力もあって、今でもあちこちでホタルを楽しむことができる。水辺においては、ホタルを楽しむことがう姿、迷つた「明かり」は、どうやっても伝わらない。今年もこんな癒やしとなる「明かり」を求めて、日の暮れに川辺へいきたい。

幻想へと誘う
梅雨のホタル

下京区・田中 正一

(公務員・36)

六月に入つていよいよ梅雨の季節。もちろん田畠にとつては大切な雨ではあるけれど、蒸し暑くてうつとうしい。そんな中、この時季しか見られないすきな光景がある。それは、「ホタルの明かり」。

大人になつてからは毎年「明かり」を求めて川辺にたたずんでいる。忙しく働く現実の世界から離れて、